

2026 年 7 月 17 日 第 3558 回例会

於： 横須賀商工会議所

持続可能な
インパクトを
生み出そう

Rotary

<点鐘・開会> 12:30 渡 邊 会長

<斉 唱> 「それでこそロータリー」

<ゲスト紹介> *前海上自衛隊横須賀地方総監 真 殿 知 彦 様

<会 長 報 告> *第1グループ会長・幹事会 報告

*ガバナー事務所より

・ロータリーレート変更のお知らせ 7月1日より1ドル159円 ⇒ 162円

・ロータリー青少年交換学生募集について

◆派遣期間：2027年8月～2028年7月 ※11カ月以上1年未満

◆留 学 先：カナダ、ブラジル、メキシコ、イタリア、ドイツ、フランス、台湾、スウェーデン、デンマークのいずれか

◆選考試験：2026年11月21日(土)/22日(日)両日

※筆記試験及び面接

◆説 明 会：2026年8月1日(土)15:00から2時間

◆場 所：第一相澤ビル8F「会議室」

・2026—27年度地区大会親睦ゴルフコンペ登録のお願いについて

日時：9月11日(金) IN、OUT 7時30分スタート

場所：大箱根カントリークラブ

費用：27165円 昼食・売店代等別 参加費：4000円

〆切：7月31日(金)

<幹 事 報 告> *ガバナー月信 No. 1

*例会終了後第1回理事役員会開催

<出 席 報 告> *出席委員会 加賀本副委員長から7月17日の出席報告

会 員 数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠 席 数	メイクアップ数	出 席 率
106名	97名	65名(2名)	32名	3名	70.10%

メイクアップ：小林(一)、鈴木(豊)、山下 各会員 理事役員会出席

<ニコニコ報告>

・三 役 前海上自衛隊横須賀地方総監 真殿知彦様、ようこそお越し頂きました。卓話楽しみにしております。また書籍もお持ち頂きありがとうございます。

・大野 健、松 川、岡田 隼、井 上、苅 山、新 倉、吉 住、植 田、長 尾、杉 浦、江 口、梁 井、角 井、野 坂、加賀本、小山 健、飯塚 健、小 澤、齋藤 健、小山 健、松本 健、佐久間、飯塚 健、鈴木 健、岡田 健、鷺 尾、高橋 健、波 島、小佐野、鈴木 健、兼 城、澤 田、加藤 健、三 堀、齋藤 健、瀬 戸、藤 村、杵 渕、田 邊、前 田、小保内 各会員

前海上自衛隊横須賀地方総監 真殿知彦様、ようこそお越しくださいました。卓話楽しみにしています。

・鷺 尾、杵 渕、松本 健、小山 健、高橋 健 各会員 誕生月祝いとして

・鷺 尾、中 村 両会員 入会月祝いとして

・小林 健 会員 「お久しぶりです。寂しかったです」と誰かが言っていました。

・石 田、加藤 健、加賀本、齋藤 健、齋藤 健、椿 各会員 本日からモアーズ8階にて「ロケのまちよこすか」展示会が始まります。当クラブ会員が多数在籍される横須賀市観光協会がロケ誘致に力を入れているので、是非見てみたいですね。

・堀 川、高橋 健、角 井、権 田、齋藤 健、木 村 各会員

7月24日、ポートマーケットにおいて横須賀ナイトマーケットが開催予定です。
7月31日に卓話でお越し頂く RUEED さんも出演されるそうです。

<卓 話>

「提督が読み解く日本の城」 ～ 空前の城ブームを楽しむための視点 ～

前海上自衛隊横須賀地方總監
真 殿 知 彦 様

昨年12月16日に横須賀地方總監を退官し、半年が経ちました。久しぶりの横須賀と言いたいところですが、実は横須賀が恋しくて、今でも毎月2回ほど訪れています。本日は卓話の機会をいただき、誠にありがとうございます。事前には海上自衛隊の話や国際情勢の話なども候補として挙がりましたが、今回はお城の話をしてほしいとのご要望をいただきました。現在、日本では空前の城ブームが起きています。若い世代から高齢者まで幅広い層が城に関心を持っていますし、各自治体も城を活用した地域振興や観光振興に力を入れています。日本城郭協会が選定する「日本百名城」は大変人気があり、全国の城を巡るスタンプラリーを楽しむ人も増えています。以前は城好きの研究者が実際に山へ入り、土塁や空堀を見つけながら城跡を発見していました。現在では航空レーザー測量技術が発達し、上空から地形を解析することで、人工的に造成された痕跡が分かるようになり、新たな城跡が続々と発見されています。また、VR技術の発達により、城の内部や城下町の様子を体験できる施設も増えています。大阪城では実際に当時の空間を疑似体験できる展示も行われています。私自身が城に魅せられたきっかけは、2012年に熊本城を訪れたことでした。当時、私は鹿屋基地で第一航空群司令を務めていました。防衛大学校時代の同期が熊本の県軍駐屯地に勤務しており、「一度遊びに来い」と誘われて熊本を訪ねました。そこで見た熊本城の姿は本当に素晴らしいものでした。城そのものの規模や迫力はもちろんですが、町全体がお城を中心に歴史や文化を大切にしていることに感銘を受けました。現在、「日本百名城」のうち98城を訪問しています。残る二つは奈良県にある楠木正成ゆかりの千早城と石川県の七尾城です。七尾城は能登半島にありますが、地震の影響で長らく立ち入りができませんでした。ようやく訪れることができそうなので、日本百名城の完全制覇も目前となりました。ところが、百名城を巡っている途中で「続日本百名城」が創設されました。その結果、目標が百城から二百城に増えてしまいました。今は続日本百名城も含めて巡っていますが、現在訪問済みなのは61城です。退官して時間もできましたので、今後10年ほどかけて全部訪問したいと考えています。また、「城郭検定」という試験もあります。4級から始まり、私は準1級まで取得しました。1級は非常に難関で、合格率は4%程度しかありません。かなり高い壁ですが、いつか挑戦してみたいと思っています。更に私は江戸城のガイドツアーも行っています。友人や知人を案内することが中心ですが、ご縁があれば一緒にしたいと思います。また、「江戸の城攻め」という本も執筆しておりますので、ご興味があればお読みいただければ幸いです。現在、「軍事研究」誌に「提督が読み解く日本の城」という連載も執筆しています。毎月見開き2ページで、日本各地の城を軍事的な視点も交えて紹介しています。今のところ1年間連載する予定ですが、少しでも多くの方に城の魅力をお伝えできればと思っています。

日本にはかつて3万以上の城が存在したといわれています。その大半は山城でした。戦国時代には山の上に築かれた城が多く、時代が進むにつれて政治や経済の中心に近い平地へと城が移っていきました。私たちが一般的に思い浮かべる城、つまり天守があり、石垣があり、壮大な建築物としての城は、実は1570年代から1615年頃までの約40年間に集中して築かれています。1570年代、織田信長が安土城を築き



ました。安土城には当時としては画期的な高い石垣が築かれ、天守も非常に壮大なものでした。この安土城をきっかけとして全国的な築城ブームが始まります。そして1615年、大坂夏の陣によって豊臣家が滅亡した頃には、日本全国に約三千の城があったといわれています。ここで、ぜひ皆様に覚えていただきたいことがあります。ご家族やご友人と城を訪れたときに、石垣を見ただけで「この城は関ヶ原の前か後か」をある程度判断できる方法です。これを覚えておくと、城見学が何倍も楽しくなります。関ヶ原の戦い以前の石垣は、技術的に高さ3～5メートル程度が限界でした。また、自然石をそのまま積み上げる「野面積み」が主流でした。一方、関ヶ原以後になると築城技術が飛躍的に発達します。大阪城では30メートル近い巨大な石垣が造られていますし、石材もきれいに加工され、隙間なく積み上げられるようになります。つまり、「低い石垣」「自然石を加工せずに積んでいる」といった特徴があれば、関ヶ原以前に築かれた可能性が高い城です。逆に、「高い石垣」「石が精密に加工されている」という特徴があれば、関ヶ原以後の城である可能性が高いと考えてよいでしょう。もちろん例外もありますが、九割程度はこの見方で判断できます。

1615年、大坂夏の陣によって豊臣家が滅亡し、徳川の時代が本格的に始まります。その年に発布されたのが「一国一城令」です。当時、日本全国には約三千の城が存在していたといわれています。しかし幕府は、一つの藩につき一つの城のみを認め、それ以外の城はすべて廃城とする方針を取りました。その結果、全国の城の約9割が失われたとされています。この政策の目的は、平和の維持でした。城は軍事力そのものです。戦国時代を終わらせた徳川幕府は、大名たちの軍事力を制限することで争いの再発を防ごうとしました。言い換えれば、一国一城令は全国規模の武装解除のようなものだったとも言えるかもしれません。譜代大名や親藩の中には例外的に複数の城を保持したケースもありましたが、基本的には一国一城の体制へ移行していきました。更に大きな転機となったのが明治維新です。1873年に廃城令が出され、多くの城は再び存続の危機を迎えました。新政府にとって城は旧体制の象徴であり、文化財としての価値はほとんど認識されていませんでした。城を解体し、その土地を軍用地や行政施設として活用しようという考えが主流だったのです。このとき全国各地で城を守ろうという運動が起こります。例えば姫路城や名古屋城は、中村重遠陸軍大佐が「これほど素晴らしい城を壊すのは惜しい」と当時の実力者の山縣有朋に上申したことで保存につながりました。彦根城も、大隈重信が明治天皇に保存を働きかけたことで残されています。松本城や松江城については、地元の有志が資金を集め、保存活動に尽力しました。つまり、現在私たちが見ることのできる名城の多くは、地元住民や有力者たちの努力によって守り抜かれたものなのです。昭和初期には約20の天守が残されていました。しかし戦災などによって失われた城も多く、現在、江戸時代以前からの天守が現存している城はわずか12城だけとなっています。



現在、日本に残る現存12天守は、まさに日本の城郭文化の宝です。代表的な城として、姫路城、松本城、犬山城、彦根城があります。これらは城好きでなくても一度は名前を聞いたことがあるでしょう。いずれも国宝に指定されており、日本を代表する名城です。更に松山城、高知城、松江城も非常に魅力的です。特に高知城は、天守だけでなく本丸御殿も現存している唯一の城です。天守と御殿がそろって残ることで、当時の城の機能や役割をより具体的に感じることができます。松江城は比較的最近になって国宝へ指定されました。堂々とした黒い天守は存在感があり、私も大変好きな城の一つです。その他にも、弘前城、丸亀城、宇和島城、備中松山城、丸岡城などがあります。備中松山城は山の上に築かれており、「天空の城」と呼ばれています。丸岡城は福井県にあり、「戦国自衛隊」等の映画のロケ地としてもしばしば

使用されています。また、姫路城は国内外の映画撮影にも数多く利用されています。ジェームズ・ボンドの映画では、姫路城が忍者学校の舞台として登場しました。当時は現在ほど文化財保護への意識が高くなく、撮影中に実際に手裏剣を投げたため建物に傷がついたという逸話も残っています。もし城に興味を持たれたなら、まずはこの12城を巡ることをおすすめします。

戦後になると各地で城を再建しようという動きが活発になります。昭和の時代に再建された城の多くは鉄筋コンクリート造でした。観光振興や地域活性化が主な目的であり、当時は「まず城を建てよう」という考え方が優先されました。そのため、歴史的な考証よりも観光施設としての役割が重視されたのです。現在の大阪城もその代表例です。外観こそ城らしく見えますが、内部は博物館として整備されており、実際の豊臣時代や徳川時代の天守とは大きく異なります。また、富山城のように、そもそも天守の存在がはっきり確認されていないにもかかわらず、観光目的で建設された例もあります。しかし平成になると流れが変わります。単なる観光施設ではなく、「可能な限り史実に忠実に復元しよう」という考え方が主流になりました。特に木造復元への関心が高まり、本来の姿に近づけようとする動きが全国で進みます。白河小峰城、掛川城、白石城、新発田城、大洲城などは、その代表的な事例です。木造で復元するためには建築基準法との調整など様々な課題がありましたが、多くの関係者の努力によって実現しました。こうした城は単なる観光施設ではなく、歴史遺産としての価値も高く評価されています。掛川城は特にお勧めです。東海道新幹線からも見ることができます。関西方面へ向かう際に右窓側の席（D、E）から注意して外を見てみると、数秒間ではありますが立派な天守を見ることができます。令和の時代に入り、現在最も注目されている城の一つが名古屋城です。名古屋城では、戦後に再建されたコンクリート天守を解体し、木造による本格復元を目指す計画が進められています。事業費は数百億円規模ともいわれており、その是非について様々な議論が行われています。議論の一つは費用の問題です。本当にそれだけの費用をかける価値があるのかという意見があります。また、木造で再建した場合、バリアフリー対応をどのように行うかという課題もあります。車椅子利用者の方が安全に見学できるようにするかという点についても、長く議論が続いています。私は様々な課題があることは理解していますが、本来の城をできる限り忠実に再現しようという取り組みには大きな意義があると考えています。また、若松城にも注目しています。現在は天守台と石垣が残るのみですが、写真や資料が数多く残されており、極めて高い精度で復元できる可能性がある城です。更に、江戸城天守の再建を目指す民間団体の活動もあります。これについては賛否両論ありますが、私はぜひ再建してほしいと思っています。東京には世界的な観光都市としての魅力がありますが、京都や奈良のような歴史的シンボルは決して多くありません。江戸城天守が復元されたなら、日本の歴史や文化を象徴する新たなランドマークになると思います。もちろん実現には多くの課題がありますが、夢のある計画だと感じています。

私がおすすめする城の一つ目は江戸城です。現在の皇居東御苑は年間を通じて一般公開されています。天守は残っていませんが、石垣や堀、門などが残されており、日本最大の城郭の規模を体感することができます。私は江戸城について「江戸城の歩き方」というNoteを八回に分けて執筆しています。実際に海上幕僚監部勤務時代には、同僚やその家族を連れて江戸城を歩くツアーを何度も行いました。約二時間で六キロほど歩くコースですが、歴史を学びながら歩いているとあっという間です。二つ目は小田原城です。小田原城はアクセスがよく、首都圏から日帰りで訪問できます。天守はコンクリートによる復元ですが、館内展示は非常に充実しており、小田原北条氏の歴史を分かりやすく学ぶことができます。また、城郭全体の復元状況も優れており、当時の規模や構造を十分に感じることができます。更に小田原城を訪れたら、ぜひ豊臣秀吉が小田原攻めの際に築いた石垣山城にも足を延ばしていただきたいと思います。山上からは小田原城を見渡すことができ、北条氏が包囲されていた状況を実感できます。当時の戦略や距離感がよく分かります。三つ目は群馬県太田市の金山城です。金山城は山城ですが、本格的な登山というほどではありません。最近熊の出没も話題になるため山城を積極的におすすめしにくい面もありますが、金山城は比較的訪れやすい城です。戦国時代には上杉氏や武田氏などが攻略を試みましたが、最後まで落城しなかった難攻不落の城で、実際に歩いてみると、敵の侵入を防ぐための工夫や防御施設がよく残っています。そして山頂付近に到着すると、大きな石垣が現れます。その瞬間には大きな感動があります。更に城跡からは太田市を一望でき、景色も素晴らしいものです。歴史好きの方はもちろん、ハイキング感覚でも楽しめる城だと思います。

城に興味を持った方には、まず「日本百名城」と「続日本百名城」のガイドブックをおすすめします。また、最近はYouTubeにも良質な解説動画が数多くあります。事前に動画で予習してから城を訪れると、現地での理解が格段に深まります。城巡りの魅力は城だけではなく、城下町を歩けば、その土地の歴史や文化に触れることができますし、名物料理も楽しめます。例えば彦根城なら近江牛など、その土地ならではの食も大きな楽しみです。

最後に少しだけ、私の新刊「小栗上野介の決断」についてご紹介させていただきます。小栗忠順については多くの書籍がありますが、私は海上自衛官としての視点から、幕末の国際情勢の中で彼がどのような危機

感を持ち、どのような国家ビジョンを描いていたのかを重視して執筆しました。当時の日本はロシア、イギリス、フランス、アメリカといった列強に囲まれていました。そのような厳しい国際環境の中で、小栗忠順は近代国家としての日本の将来を見据え、横須賀製鉄所の建設をはじめとする多くの施策を推進しました。私はその思想や先見性こそが重要であると考えています。また現在は、JAL123便墜落事故に関する様々な誤情報を検証し、事実に基づいて発信する活動にも取り組んでいます。近年はインターネット上で根拠のない説が広がっていますが、当時を知る一人として、また自衛隊出身者として、できる限り正確な記録を残していきたいと考えています。ご清聴ありがとうございました。

<閉会・点鐘> 13:30 渡 邊 会長

週報担当 齋 藤 麻 梨

